篝火 廿七

E 23
48

東京大学総合図書館

東京帝國大學圖書印

東京大学総合図書館

これはよの人の出でゝ物かたりおきなの
海老君と出でゝに書きて見てうち染
源氏のおとゝきつねしらて何をしてあれ
人見の前に見て出でたりけるさん女これを聞
ありのかほを知りても年すくに物うりして
くゝ人ありかん世にさかひ人のけしうらもの様
我もしく〳〵とみ紙に何事もに物さき
色を見し君様と見てあるも色みしおつ様も。
くけしたる身すかへよろ川の事しえて
縁して物おもひて物の物書をていて

東京大学総合図書館

おもしろき紅梅の侍りつる前にてけれはよそへて
折やとききよし那かなる笋院の此也を志らす実
なと次第まいりてまいつ御前にふる此の御前にさき
すや御門前にも無いのよ君に出てけ志を
すこえてもいとよくきゝしてゐせられけるきこゆ
色ようそとも枝に侍りとて清色のまことに折し
ふとくみちもてゆく紅艹すいてゐて梅の実
はこの御前侍り紅へ庭なるつすゝけ
きって紅梅枝にきすりめてあ風をよしそ
吹いてせこの歌しつるさ花しまた色ら梅

ての思ひの程つゝみ志もしくわうもやかくに
いゆしくして思てるこしよすしつきつれて
紅梅大六日乃夕院に参るかくつゝてそとこ
しるき紅梅前義つ萩の枝にて庭かく
河の紅すの程り那りみえ思ひし御前まれて
とうこてにうそ梅に紅つりの侍御色もなん
中と院の前きうらふく衣青も紅文ある
人の子たかをなさんよ此者せいわう紅の色して
はまんの具早すつきてそてもちりとは月すはつ
すあんの母梅なかくこきし つ前に侍世らし

こそ深けれ明ける月のほのかに家しきも見え
見えあさり梅さらき由この木めしたりし秋
青柳の糸のみぬれそとよりも露にくはの露きき
こゝにうたは明けまへのこい伴をまねくおし
きほとあ出沙弟子女の涛ど海をむひかり
ゆらくせてあらぬふしにこそ見るにかなうちあはく
けりなかくらしこしらこ弟めに薄くなり物を
ゆく海にましく年の宮しかうに移う
うけまり色ありすくおけし風とて梅さし
ぶ人のさへいぐこゝろし此弟よ夏の月なれ

おゆは庭の出ありあまきの花とわかうしくおもふ
わしやとの名まき梅
うり火ありしらこ梅庭の若みりおもふ
来よがにふかきせあはのなかりぬれにたまで
ゆくもまた沢梅のうすてくはをかえてるし
ゆうとかれて経梅母をこあちゅの所りもや
とおむ沢て
紀清ち見まてけらてようり火の
たよりに爲を梅をあうりとおうた人のあゆ
と思ひ経まじしすとつひ経へいくさやとてこ

女まゐりさかしのやうにし（ただの）聞えたる（声）
侍りけり御前ありせ女御もとめ（中将のまへのあそび）ならはし
侍り給ふあそびつゝまつる中将まゐりたる人々かたれし
いとわろくは思ひたゞ（さ）のみ給ひそよらしまゐるを
女君ハ御せらうちとけたまへるにまうさへき
すゑしたまへりやうにみかへさうぢ上（あとのまつりのけいこ）
人まつりの風の音はしけりけると
きこし侍りの聞えし聞えとのをかしうもし
とて聞こえ給ひてまつりきこしめ
いまいちの源中将ものしたまひて

しく物語のやうに中将ぞつゝいみ
してことはたゞすまうしゐてられしいま
のみねたるしろはそのいろをふう
女君御る出てりとのいてまいる御目をなす
うたゞくしも出でたは中将はゆつくせ給ひまち
御にてれちりおもしろのあつさをふれさく
おかしく次けるやうりなりとそれから
ともに御きこえく人々物語かつかれり
出なといはとおもひもそなさるりと
其人人

京にもこうとへ給へはいとゝ暮けれは心哀とさて
毎ま像人々しせんの中の田舎りせんの御浦
き物まれい由やこれはきこえしらせ給ふ人志にて
なまめきて給ふてなまてけてありまたおもひより
すれ大中将は色のかはりにそおりすなる
みそらをはなれ井てより悲しのひまゝし
末の世の事なれはさ海らくはその御あはれおき
色よ事ともまた身の上に侍

一校了

B7874

東京大学総合図書館